

---

# NARUTO 木の葉を守りし閃光の遺産

螺旋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NARUTO 木の葉を守りし閃光の遺産

### 【Nコード】

N9423V

### 【作者名】

螺旋

### 【あらすじ】

昔、妖狐ありけり。

その狐、九つの尾あり。

その尾一度振らば山崩れ津波立つ。

これに困じて、人ども忍の輩を集めけり。

僅か一人が忍の者、生死をかけこれを赤子に、封印せしめるがその者、死にけり。

その忍の者名を、四代目火影と申す……。

妖狐を封印されし赤子、瞳に力を宿しけり。

## 第零話 プロローグ

昔、妖狐ありけり。

その狐、九つの尾あり。

その尾一度振らば山崩れ津波立つ。

これに困じて、人ども忍の輩を集めけり。

僅か一人が忍の者、生死をかけこれを封印せしめるがその者、死にけり。

その忍の者名を、四代目火影と申す……。

妖狐を封印されしは、一人の赤子。

その赤子、瞳に力を宿しけり。

その力、この混沌とした戦乱の世界を破壊する力なり。

その忍の者名を、四代目火影と申す……。

妖狐を封印されし赤子、瞳に力を宿しけり。

## 第壹話 漆黒の瞬神（前書き）

はじめまして螺旋です。

この物語は、NARUTOの再構成となっています。

駄文で、不定期更新となりますがよろしく願います。

## 第卅話 漆黒の瞬神

忍五大国、火の国、木の葉隠れの里郊外。

夜の闇に染まる森の中を、金色の髪の少年は駆け抜ける。

【全く、火影のじっちゃんも人使いが荒いな。Sランク任務終わって、里に帰った途端、また任務かよ。】

金色の少年、うずまきナルトはふと愚痴を零す。

【まあ、Bランク任務だし適当に流すとするか。】

そう言うとなルトは、闇の中に溶け込んで行った。

木の葉郊外、数多ある演習場の一つに一人の男が立っていた。

男の名は、ミズキという。

普段は、アカデミーの教師として生徒たちから慕われているが、心の奥底では欲望が渦巻く野心家である。

「クククツ、この秘伝書さえあれば俺は。」

ミズキは、秘伝書を見て笑みを浮かべる。里の重要機密の禁術を、封印した秘伝書を盗み出しそれを、手土産にしてある隠れ里に逃亡するという計画が、ここまで順調に事を運んでいるからである。

「何やってんだってばよ、ミズキ先生。」

ミズキは、突然現れた少年に一瞬驚いたが、現れたのが金色の髪を持ち、お馴染みのオレンジのジャージを着込んだ自身の良く知る、人物であったことで警戒を解いた。

「ナルト君こそ、こんな所でどうしたんです。」

「いや、オレってば、明日あるアカデミーの手裏剣のテスト。絶対合格したいから、ここで練習してたんだってよ。」

「へえ、それは感心ですね。そうだ、私とその練習手伝いしましょうか？」

あくまで、自然体で近寄るミズキ。しかし、その手にはクナイが握られている。相手は、あの落ちこぼれのナルトだ恐るに足りない。

「先生ありがとうだってばよ。でも、俺一人で大丈夫だから。」

「それは、残念ですね。では、さっさと死ね！」

流れ落ちる鮮血、クナイはナルトの心臓をひと突き、それだけでナルトは崩れ落ちる。

「フン。所詮落ちこぼれ、この程度か。まあ、こいつは化け物だ、念には念をいれて首でも落としておくか。」

【おい、一体誰の首を落とすと言うのだ。】

とミズキは声がした方向に振り向くと、そこには先程と打って変わった漆黒の装束に、身を包んだナルトが立っていた。

「ハハハ……何でお前が生きている。オレが確かに殺したはず。」  
ミズキの顔に動揺が浮かぶ。

【馬鹿か、良く下を見てみる。】

その瞬間、ミズキの足元にあるナルトの死体が、ボンッと煙をあげて消え失せた。

【影分身の術だ、それぐらい見破れ。まあ、貴様ではその程度が限界か。】

「お……、お前は一体何……。」

ミズキは最後まで、言葉を紡ぐことができなかった。

何故なら、自分の首元にクナイが当てられていたからだ。

「い……いつの間に、…オレの背後を。」

今の、ナルト動きは自分には全く見えていない。おかしい、上忍相手ならともかく相手は普段、分身もまともに出来ない、アカデミー始まって以来の落ちこぼれ。そんな奴に、今自分が圧倒されているという事実をミズキは受け入れることが出来ない。

【お前に説明する義理はない。どの道お前は、終わりだ。】

「何つつつ……。」

振り返った際に見てしまった。ナルト瞳に、現れた深紅の勾玉を…



…ミズキの意識は闇に沈んだ……………。

【これで、第一目標は達した。】

「お疲れ様、どうやらもう片付いたようね夜狐。」

ナルトの背後から現れたのは、同じ装束を羽織った自分のことを、良く知る一人の女。

【アンコか、こんな所でどうした？】

「どうしたも、こっしたも、無いわよ！！火影様の命令で人がせつかく、あんたの手伝いに来てあげたのに、その態度は何？」

アンコはナルトの首筋を掴み詰め寄る。

【悪かったってばよ！この通りだ許してくれ。】

あまりに突然の、アンコの行動に表の口調に戻ってしまうナルト。

「まあ良いわ。今回は許してあげる。それにしてもあんたが、たかだか中忍相手に写輪眼を使うなんて、珍しいじゃない。」

【いや、今回はコイツの生け捕りが命令だからな。】

ナルトは倒れているミズキを指す。

「成る程ね。確かに、あんたが普通にやり合ったら相手を生かしておくなんて、まず無理ね。それに、もう一つの眼は、殺しかねないし。」

そう言っつて、ナルトの肩に手を置く。

【解って貰えて幸いだ。ということで、コイツを暗部に引き渡してくれ。オレは残りの賊を狩りに行く。】

そう言っつてナルトは立ち上がった。

「仕方ないわね。そのかわり、デート一回ね？」

ニツコリ笑顔を浮かべるアンコ。

【ハア、解ったよ。じゃあ、後は頼んだ。】

「了解。ナルト、期待してるわね？」

と言っアンコは姿を消した。

【さてと、オレもそろそろ行くとするか。】

そして、ナルトは再び夜の闇へ飛び込んだ。

(しかし、ミズキを仕留める直前、奴とは別のチャクラを感じたが。まあ、大したことはないだろう。)

この時、ナルトは知らなかった。

そうこれが、自分の運命を大きく変えるきっかけとなるとは……………。

## 第壹話 漆黒の瞬神（後書き）

〔人物紹介〕

うずまき ナルト

所属 木の葉隠れ

暗殺部隊 零番隊隊長

火の国、木の葉隠れの里の忍。かつて、木の葉を襲った九尾の妖狐を封印された人柱力である。

そのせいで、里の人間から疎まれ、差別され続けてきたという暗い過去がある。

普段は、落ちこぼれの問題児を演じているが、本当の正体は木の葉暗殺部隊、通称暗部の零番隊、隊長である。

しかし、その正体を知る者は里の人間でも一部である。

忍としての能力も高く、その実力は現三代目火影以上。

他の隠れ里からは、その早すぎる戦闘術から木の葉の漆黒の瞬神、夜狐として恐れられている。

理由は不明だが、本来血継限界とされている、写輪眼と輪廻眼の両方を開眼している、

第貳話 少女との出会い（前書き）

少年は少女と出会う。

それは運命の悪戯か、必然か。

どちらにせよ、二人の運命は大きく交わる。

## 第貳話 少女との出会い

木の葉の里、忍者学校アカデミー。

時代を担う、未来の忍を養成する忍者養成施設である。

「おっす、シカマル、チョウジ。」

ナルトは、教室に入り自分のことを良く知る、友人二人に声をかける。

「よう、ナルト。今日は、お前にしては珍しく、早い登校だな。」

その声を、声をかけたのは奈良一族の子、奈良シカマル。

「そうだね…モグモグ…ナルトにしては…モグモグ…珍しいよね…  
モグモグ。」

一方、こっちのお菓子を食べながら話しているのは、秋道一族の子、秋道チョウジ。

二人ともナルトの数少ない友人であり、また、アカデミー内でナルトの正体を知る、数少ない人物である。

「いや、二人に頼みたいことがあるんだけどさ。」

申し訳なさそうに、頭を掻いているナルト。

「どうした？お前が、頼み事とは珍しいな。」

「そうだね、珍しいね…モグモグ…ナルトが頼みことなんて…モグモグ。」

ちよいちよいと、手招きをするナルト。耳を貸せという合図だろう。それを、理解した二人はナルトに耳を傾ける。

【どうやら、オレの正体を掴んだ奴がいる。ソイツを見付けて欲しい。】

「…ハア…！」

二人とも驚きの余り声をあげる。

「お前、それで大丈夫なのかよ？」

ナルトに詰め寄るシカマル。

【いや、感知したチャクラからして、相手は下忍。大したことはないと思うが、一念には念を入れておこうと思ってな。】

「なるほど、下忍程度ということはアカデミーの奴の可能性が高いと踏んで、オレらに頼んだという訳か。」

ふう、とため息をつきシカマルはナルトから離れる。

【二人とも頼めるか？】

「わかった。そういうことなら、オレらに任せろ。それにしても、お前が見落とすなんて珍しいな。」

【仕方がないさ、任務の途中だったからな。】

「まっ、ナルトの頼みなら断る理由もないね。ね、シカマル。」

そう言っただけでチヨウジも協力する気満々である。

「確かに、今回ばかりはめんどくせえとは言ってられないな。」

【すまないな、二人とも。】

ナルトも、素直に感謝の気持ちを述べる。

「気にするな。困った時はお互い様だ。」

「シカマルの言うとおりだよナルト。」

【ああ、わかった。二人ともよろしく頼む。あつ、それと、くノークラスはヒナタに頼んであるから、二人は男子の方をあたってくれ。】

「そいつは助かる。正直オレは、女が苦手だからな。」

木の葉隠れ名門、日向一族の宗家当主の娘、日向ヒナタ、彼女もナルトの友人であり、自分たちと同じくナルトの正体を知る人物である。彼女が協力しているなら、女子の方は大丈夫だろうとシカマルは踏んだ。

しかし、後々この認識が甘かったことをシカマルは思い知ることになる。

「よし、みんな席に着け！」



ちょうど、話を終えた時始業ベルが鳴り担任のイルカが、入ってきた。

それを聞き、三人とも席に着く。

「よし、感心感心。今日は、全員来ているな。」

そう言って、イルカは名簿で出席を確認する。

「それじゃみんな、これから予定していた通り手裏剣の実技テストを行う。各自、準備をして屋外演習場に集合！」

イルカの掛け声で、生徒はみんな外へと向かう。

ナルトも皆と同じく外に出ようとしたところ。

「ナルト、ちょっと来い。」

とイルカに呼び止められた。

それを見て、シカマルとチョウジは先行ってるぜと言い残して、先に出て行った。

「なんだってばよ、イルカ先生。」すると、イルカは申し訳なさそうな顔をして

「ミズキの件は、火影様から聞いたよ。すまないナルト、オレが気付かないばかりに。」

と言い頭を下げた。

【頭を上げてくれイルカ先生。オレは、大丈夫だから。】

「しかし、いつもナルト、お前には里のためとはいえ、嫌な想いをさせてばかりだ。せめて、オレに何か出来れば……。」

イルカは悔しさの余り拳を握りしめる。

【先生がそう想ってくれるだけで、オレは十分だつて。それに、オレは里のためでなく自分の、守りたい者のため闘っているだけだし、】

そう言つてナルトは微笑む。

実際、幼き頃から里人から迫害されてきたナルトにとって、そんな自分を慕ってくれるイルカのような存在は、大切な人たちであり護るべき存在である。

「わかった。お前がそう言うなら、オレからは何も言うことはないよ。ただナルト、お前はオレの大切な教え子だ無理だけはするな。」

そう言つてイルカは、ナルトの肩に手を置く。

【ありがとう、イルカ先生。】

そう言つてナルトは微笑んだ。

「よし、それじゃ、手裏剣のテストもあるし外に行くか！」

【そうだな。皆を待たせるのも悪いし。】

そう言うと、二人は教室を後にした……。

アカデミーにある屋外演習場、此処ではクナイや手裏剣術の練習、組み手など、忍として必要な基礎を身につける為の設備が整っており、良く実技テストなども行われる場所でもある。

現在、行われているのは手裏剣術のテストであり、テストは手裏剣6枚を的目掛け投げ、中心近くに当てるほど得点が高いという内容だ。

そして、テストを受けている生徒達の中で一際目立っている生徒が一人。

名を、うちはサスケと言う。木の葉隠れの里で数多ある名家の中でも、最も名門とされる一族、うちは一族の末裔でありこの、アカデミーの中でも天才とされている実力を持っている。

「キヤー！サスケ君！」

サスケが綺麗に、すべての手裏剣を的の中心に当てたのを見て女子達は、口々に叫ぶ。

それを見ていたシカマルは、隣に座っている友人三人に話し掛ける。

「まったく、ドイツもコイツもサスケ、サスケってあんな透かした奴の何処が良いのかね？全く女って奴はわからねえ。」

「仕方ないってばよ。容姿端麗、成績優秀、名門うちは一族の生き残りとなれば非の打ち所が無いってばよ。」

ナルトはシカマルの問いに、羨みよりもこの状況を楽しんでいる様に答える。チヨウジもナルトの答えにウンウンと、相槌を打つ。

それを見てシカマルは溜息をつき、話しを続けた。

「ナルト、お前がもし本気を出せばサスケに勝てるだろ。」

「勝てるどころか、里が無くなると思うよ。」

ナルトの代わりにチヨウジが答えた。

そしてそれを聞き、苦笑しているナルトを見て冗談ではないとシカマルは理解した。

「でも、まあ正体を隠す為とは言え落ちこぼれを演じるのも、中々面倒臭いな。」

【まあ、オレの中にコイツが、封印されている以上仕方ないさ。】

そう言っつて自分の腹を指すナルト。

「でも…別にナルト君は何も悪いことしてないのに。」

そう答えたのはナルトの横に座るヒナタである。幼い頃からナルトのことを知るヒナタは、ナルトが里人から酷く疎まれ、恐れられていることを知っている。しかし、今木の葉が平和なもの、ナルトの犠牲の上で成り立っていることを知る者は少ない。ヒナタはそれが

悔しくて堪らない。何より自分の愛する少年が、これ以上馬鹿にされるのが許せ無いのである。

【ありがとうヒナタ。でも、人は力を持つ者を恐れる。だから、今はこのままで良いんだ。】

「それでも……」

と言うヒナタの頭をナルトは優しく撫でる。突然のナルトの行動にヒナタの顔は赤面するが、気にすることなくナルトは続ける。

【ヒナタ、オレはこうやって自分の事を想ってくれる人がいる。それだけで充分幸せだよ。】

そう言つてナルトは微笑む。ヒナタも、自分が愛する少年の微笑みを見て、思わず微笑む。

「悪いなナルト、二人の間を邪魔する訳じゃないが、そろそろ出番みたいだぜ。」

ナルトの順番が回つて来たことをシカマルが、知らせる。

【さて、軽く落ちこぼれを演じてくるとするか。】

そう言つとナルトは面倒臭そうに立ち上がった。……………

ナルトはホルスターから手裏剣を取り出し、的に向かって投げる。しかし、手裏剣は一つも的に当たることなく在らぬ方向へと飛んでいく。それを見ていた他の生徒達は、声を出して笑う。いつもと変

わからない、その様子を一人疑問に思っている少女がいた。

（昨日のアレって、やっぱりナルトよね。）

少女の名は、山中いの。木の葉隠れ、山中一族の娘である。くのー教室でのトップレベルの成績と、その端麗な容姿から美少女とされている。

普段は、サスケに恋するいのであるが、今自分を悩ませているサスケではない。いのは、今自分を悩ませる原因の一人の少年のことを見つめる。……………

昨夜、明日のテストの為に郊外の演習場で、手裏剣術の練習をしていたいのは、近づく気配に気付きとっさに身を隠した。

そこに、現れたのは自分も良く知るアカデミーの教師ミズキであった。

（なんで、こんな所にミズキ先生がいるよ？）と思った、いのであるがしばらくミズキの行動を見て、ミズキの目的が里抜けであるということを理解した。だが相手は中忍、自分が到底敵う相手ではない。

そうこうしている中に現れたのは、自分も良く知る人物うずまきナルト。

（何しに来たのよ馬鹿！殺されわよ。）アカデミーで落ちこぼれのナルトが勝てるハズがない。

しかし、いのが思い描いた予測と異なりミズキを圧倒したナルト。アレは、自分の良く知るナルトでは無かった。……………

「ハア」。考えても仕方ないか。「いのは、小さく溜息をつく。

「どうしたの？いのが溜息つくなんて珍しいじゃない。」

と言って声を掛けて来たのは、自分が良く知る桃色の髪をした少女、春野サクラ。いのとは親友であり、恋のライバルでもある。

「別に、大したことじゃ無いわよ。」

「へえ〜。でもそう言う所がますます怪しい。」

「本当に大したことじゃ無いのよ、全く。」

「冗談よ冗談。気を悪くしたなら謝るわ。」

いのが不機嫌になったのを知り謝るサクラ。

「ねえサクラ、あんたナルトとサスケ君どっちが強いと思う？」

友人の突拍子もない質問に驚くサクラであったが、気を取り直して答えた。

「なに言ってるのよ。サスケ君に決まってるじゃない。ドベで落ちこぼれのナルトが勝てるハズ無いでしょ。」

さも当たり前のことのようにサクラは答える。

「やっぱりそうね。解った、ありがとう。」

自分が、予想していた通りの答えが返ってきたことにいのはハァ〜と溜息を付いた。

「何よ、当たり前のこと聞いていの、あんた本当に大丈夫？」

いの、態度に疑問を持ったサクラ。

「いや、本当になんでもないの。心配しないで。」

その答えに納得がいかないサクラであったが、本人がそう言うので気にしない事にした。

(考えても仕方ない。こうなったら、本人に確かめるのが一番。そうと決まれば行動あるのみよ。)

そう考えたいのは、怪しい笑みを浮かべた。

【なんだ。今の悪寒は？】

いきなり感じた寒気にナルトは体を震わせる。

「ナルト君大丈夫？」

突然震え出したナルトを心配してヒナタは声を掛ける。

【大丈夫だヒナタ。ありがとう。】

それを聞いて安心したのかヒナタは微笑む。

(それにしても、さっきの悪寒は一体なんだったのだ。)

解らないナルトは首を傾げる。

(まあ、考えても仕方が無いか。)



そう考えたナルトは気にすることを止めた……………。

【じゃあな、ヒナタ、シカマル、チョウジ。】

アカデミーでの一日も終わり四人は帰る準備を始める。

「お疲れ様。ナルト君また明日。」

「おう、またなナルト。」

「じゃあね、ナルト。」

ナルト、ヒナタ、シカマル、チョウジは、それぞれお互いに別れの挨拶を済まし帰路に着く。

(ふう、いつも通りとはいえ、落ちこぼれを演じるのは疲れるな。)  
今日のことを、振り返りながらナルトは帰り道を歩く。  
そんな中、自分の後を付ける一つの気配に気が付いたナルトは後ろを振り返る。

【誰かは知らないが、オレに用があるのなら隠れて無いで出て来い！】

その声を聞いて、影から一つの人影が現れた。

「どうしたのナルト？いきなりそんな大声出して。」

ナルトは、アカデミーに通う自分にとって良く知る人間が現れたこ

とに少し驚いたが、本来の落ちこぼれのナルトに顔を戻す。

「いの、それでオレになんか用かってばよ？」

あくまで自然体で話を聞くナルト。しかし、次にいのが放った言葉は、ナルトの予想を超えるモノだった。

「それじゃ聞くわね。ナルトあんた、夕べ何処にいたの？」

いのの質問により、ナルトは昨日感じた気配の正体がコイツだと確信した。

「いきなり何を言うかと思えば、昨日の晩は家でゆっくりしてっただけだよ。」

「嘘ね。貴方は昨日里の郊外の演習場に居た。そこで、ミズキ先生あんたが戦っていたのを私は見たのよ。」

「なんで、嘘を付く必要があるんだってばよ？ だいたい、オレがミズキ先生と戦う理由が何処に在るんだってばよ？」

あくまで、白を切り通そうとするナルト。そんなナルトの言葉を無視して、いのは続ける。

「恐らく昨晚、貴方は里からミズキ先生の始末を命じられていた、違う？」

「それは、可笑しいってばよ。だいたい、落ちこぼれのオレがミズキ先生と互角に戦えるハズが無いってばよ。」

「いいえ、私が見る限りあんたはミスキ先生を圧倒していた。」

「ねえナルト、貴方は本来の力を隠している、違う？だいたい、影分身なんて高等忍術が使える時点で今までのあんたの実力からして考えられないし。」

「だとすれば、アカデミーでの貴方は、何らかの理由で本来の実力を隠すために落ちこぼれを演じている。」

確信を突いてくるいの。

ナルトも外見は平静を装っているが、内心はいのの推理力と観察眼に驚いていた。

「ナルト、貴方それだけの力を隠してまで何で落ちこぼれを演じる必要があるの？」

そう言いながらいののは、ナルトに詰め寄る。いのの真剣な眼差しにこれ以上の、誤魔化しは効かないとナルトが思ったその時、近づく複数の殺気に気が付きナルトはいのを抱えその場を飛びのいた。

「ちょっといきなり何するのよ！…」突然ナルトに抱えられたいのは、驚き声を上げるがつい先程自分達が立っていた場所に無数のクナイが刺さったことで冷静に戻る。

「何者だつてばよ。」

ナルトの問いに応えるかの様に、三人の少年達が姿を現す。

見たところ少年達は、額当てをしている。恐らく、自分よりも一期上の下忍だといのは予想した。

「いきなりなんてことするのよあんた達！」

いきなり襲撃してきた奴らに怒りをあらわにするのだが、それらの殺気がナルトに向けられていることを感じ疑問に思った。

「オレに何か用かってばよ？」

ナルトの問いに三人の内一人の少年が答えた。

「よう、落ちこぼれ。化け物が女連れて調子に乗ってんじゃねえよ！」

明らかにその言葉には、中傷と差別が込められていた。

「いい加減にきなさいよ、あんた達！一体ナルトが何をしたっていうのよ！」

ナルトを馬鹿にされたことが自分でも何故だか判らないが、無性に腹が立った。

「黙れよ女！お前もコイツと同じ化け物か？」

「さつきから聞いていれば好きかって言って。仮に：ナルトが何者であったとしても、私からしたら通り縋りの女の子に、クナイを投げ突けるあんた達の方がよっぽど化け物よ。」

「ふざけんじゃねえ。俺らをそんな化け物と同じにするんじゃねえ。」

「いに痛い所を突かれ逆上する少年達。しかし、いのはお構いなく続ける。」

「あんだ達とナルトが同等。笑わせるんじゃないよ！！言っとくけどナルトはあんだ達みたいな屑とは違うわ。」

「絶対許さねえ！馬鹿にしゃがってコイツら殺してやる。」  
少年達は、ナルトと比較され自分達が劣っているとされた事が余程頭に來たようだ。

遂に我慢の限界を超えた一人の少年が、クナイを数本の目掛け投げ突けた。

（来る！）といのは身構えていたが。クナイは全て、ナルトの投げたクナイに、叩き落とされた。

「いのは関係無いってばよ。だからコイツは、見逃してくんねえかな？」

ナルトは自分を逃がそうとしているようだが、いの中から見ても少年達が、自分達を逃がす気は無いことは理解出来る。その証拠に少年達は笑っていた。

「馬鹿か！誰がためえの言うことなんて聞くかよ、化け物。」

「どうせその女もお前と同じ化け物だろ、だったら一緒にボコボコに……」

少年達は次の言葉を発することが出来なかった。  
何故なら自分達を襲う、とてつもない殺気に恐怖で呼吸すらままならない状態であったからだ。

【いい加減にしる貴様ら！！それとも何か？そんなに早く、この世に別れを告げたいか？】

少年達は、突然のナルトの変貌に恐怖を感じて震えている。いのもまた、自分に向けられた殺気では無いとはいえ、あまりの強い殺気に足が竦んでしまっている。

【おい、貴様ら今すぐ此処から立ち去れ！そして、いのに二度と近づくな、いいな！もし、近づけば命はないと思え！！】

ナルトはそう言うと殺気を解いた。途端に自由に なる少年達、しかし、後遺症からか彼らはまだ震えている。

「くそがぁー！」

震えているにも関わらず、少年達の一人がナルトに殴り掛かる。恐怖よりも、自分のプライドをスタスタにされたことによる怒りが勝ったからである。

ガッ！ナルトは迫り来る拳を相手の手首を掴むことで、簡単に防いだ。少年は腕を動かそうとするが、あまりの力にぴくりとも動かない。

それどころか、掴まれた手首はミシミシと嫌な音を発している。

「ぐう……がぁ……離せ……離してくれ。」

少年は苦しみの声を上げるが、ナルトは手首を締め上げる力を緩めない。そして……ゴツキンと嫌な音を発して少年の手首はいとも簡単に折られた。

「ギャー……アー。」

手首からくる激痛にのたうち回る少年。

【…無知とは恐ろしいことだな。こうやって自分の身を滅ぼすことに繋がる。】

仲間が苦しみのたうちまわる様をみて少年達の顔は、再び恐怖に染まる。そんな中彼らは見てしまった。

金色の少年の縦に裂けた深紅の瞳を、この時初めて相手にしていたのが真正正銘の化け物であったと彼らは理解した。

【さあ、次はどいつを料理しようか？】

「……た…た…助けてくれ…ウワァー！」

そう叫びながら少年達は我さきにと逃げ出した。そして、それを確認したナルトの瞳も元に戻る。同時にいのの、緊張の糸も切れた。

（それにしても、なんて殺気を放つのよ。今のに比べたらさっきのなんてまるで、お遊びじゃない。）しかし、これでのいのは自分の推測が間違いではないことを確信した。

【大丈夫か、いの？】

「ええ、何とかね。」

ゆっくりと立ち上がるいの。

【すまない、巻き込んでしまった。】

「別に構わないわよ。助けて貰った訳だし。」そう言いながら、い

のは微笑む。

それに吊られてナルトも思わず、微笑んでしまう。

【…っと…それより、オレに聞きたいことがあるんじゃないか？】

ナルトに指摘されてやっと、いのは思い出した。

「そ…そうよナルト！さっきの話の続きだけどそれが本来の貴方なのね？」

【そうだ。これが本来のオレの姿だよ。】

「…なら、何故本来の貴方を隠す必要があるの？…それともさっきの連中と何か、関係があるの？」

【アカデミーの教科書、木の葉の歴史135ページ。】

「えっ……？」

いのは、ふとナルトが呟いたことに疑問を感じ声が出てしまう。確か、そのページは……。

【そうだよ、いのは。12年前、突如として木の葉を襲った九尾の妖狐、それが四代目火影の手によってオレの身体に封印されている。】

あまりにも、突然の真実に驚くいの。

「じゃあ、さっきの奴らが言っていた化け物って…。」



【ああ、間違いではない。恐らく、オレに封印されている九尾の事だろう。】

「でも、そんなの間違ってる！…だって、…ナルトのお陰で私達助かっているのに。」

【だが、里の連中の多数はオレを九尾として見ている。

お陰で幼い頃から、里人から疎まれ続けてきた。誰も望んでこなかった訳でもないのにな。】

そう言うナルトの姿が、いには何処か悲しそうに見えた。

【…それに、人は力を恐れる。その力が、大きい程強くな。だから…オレは、落ちこぼれを演じる必要があったのさ。】

いのは、本当の彼を知ってしまった。しかし、彼の歩んで来た道は、自分と同一年の少年が歩むにしてはあまりにも残酷であった。

【いの、…ごめん。…悪い事は言わない。今日あったことは、全て忘れる。そして、明日からはオレに近づくな。】

突然、予想もしなかった答えが返ってきた事に驚くいのだが、それと同時に怒りも込み上げてきた。

「どうして！私をあんな奴らと一緒にしないで！それに…私はあんなのこと…。」

そこから先を言おうとして、いのは何故自分がこの少年にこだわるのか解らなくなった。自分が好きなのは、サスケのハズなのに…。

それを見てナルトふつと微笑む。

【ありがとう、いの。今日庇ってくれて嬉しかった。でも、これから先はいのの為にはならない。】

そう言って微笑むナルトの顔は、綺麗だった。いのはこの瞬間、気付いてしまった。自分は、この少年を愛している。

サスケに対しては、ただの憧れだった。

しかし、今自分はこの少年を守りたい。少しでも心の傷を癒してやりたいと、そう心から想っている。

【ありがとうの、さようなら。】

そう言ってナルトは、瞬神の術でこの場を後にしようとする。

その時、後ろからのいに抱き抱き着かれた。

【どうしたいの？】

振り向くといのの頬が濡れていた。良く見ると泣いている。

【…い…いの？】

いのも、自分でも何故、涙が止まらないか判らないが、このまま彼を行かせると自分は一生後悔すると、思ったからである。

「…行かないで……そうやって…一人で…何もかも背負い込まないで…」

【わ…判ったから泣くなつてばよ。…ごめん、オレはもう何処にも行かないから、泣くな。】

そう言っているいの、頭を優しく撫でるナルト。

いのに泣き付かれ、珍しく焦ったナルト。

その証拠に口調まで表に戻ってしまっている。

しばらくして、安心したのかいのの、寝息が聴こえてきた。

抱いた顔を覗くと、心地好さそうに眠っている。

（まさか、自分の為に涙を流してくれる人がいるとは。ヒナタ以来だ。な。）そう思いながら、いのを腕に抱くナルト。

…そして、少年は少女と出会った。

この出会いは、少女の運命を大きく加速させる事になる。

誰よりも強く誰よりも弱い、少年を守り支える盾。

この少女が遠くない未来、漆黒の瞬神と肩を並べる存在となる事を、まだ誰も知らない。

## 第貳話 少女との出会い（後書き）

### 人物紹介

みたらし アンコ

所属 木の葉の里

特別上忍

木の葉の里の忍。幼い頃から、ナルトの面倒を見ておりナルトにとつては良きお姉さんの存在。

しかし、アンコの方はナルトに対して過保護になりがちである。

当然、ナルトの正体を知っており彼が暗部に所属している事も知っている。

忍としての実力は高く、特に体術は、伝説の三忍綱手に迫る力を持つ。

実際、ナルトも彼女の实力は認めており暗部の任務では、よくツマンセルを組む。

## 第参話 少女と少女の出会い（前書き）

螺旋です。

この度は、木の葉を守りし閃光遺産を読んで頂きありがとうございますとござい  
ます。

今回、登場するいのの母親ですが、原作で名前が明かされていない  
様なので、私の方で申し訳ありませんが【山中いずみ】と言う名前  
を付けさせて頂きました。

あくまで、この木の葉を守りし閃光の遺産の中でのオリジナル設定  
ですので、皆様にはご理解頂けると幸いです。

## 第参話 少女と少女の出会い

【…う…う…ん…。】

カーテンの隙間から差し込んでくる。朝日の眩しさに思わず、ゆっくりと目を覚ますナルト。

【…もう、朝か。】

そう言ってベッドから、身体を起こすと。

「…う…ん…」

自分の真横で気持ち良さそうに眠る、一人の少女がいた。

【な……い……いの？】

さすがに、木の葉最強とされる漆黒の瞬神も、これには驚きを隠せない。

そして、焦ったナルトはベッドから擦れ落ちた。……………

木の葉の里にある、やまなか花店。いのの実家であり、山中家が経営する花屋で、此处では他国ではなかなか見られない珍しい花々が並んでいる。

その開店1時間前、いの、父親の山中いのいち、母親の山中いずみ、ナルトの四人でちょうど今、朝食を取り終わったところだ。

【痛ッ〜！】

そう言って頭を摩るナルト。

「全く、大袈裟ね。そんなに、驚かなくてもいいでしょうに!」「いのはそう言いながら、食べ終わった食器を片づける。

「大丈夫かい、ナルト?」「いのいちは、頭を押さえるナルトに声を掛ける。

「どうやら、今朝ベッドから落ちたみたいよ。」「  
いずみは、いのから事の顛末を聞いていたので全てを知っている。

【大丈夫だ、いのいちのおっちゃん。】  
そう言いながらも、まだ頭は痛む。

「それよりも、ナルト。そろそろ学校行きましょ。」「  
片付けを終えたいのは、洗面所へと向かう。

【わかった。今準備する。】  
そして、ナルトも同じく洗面所へと向かった。……………

「行ってきます!」「  
そう言って二人は、玄関を出る。後方から、いのいちといずみが、  
行ってらっしゃい、と言う声が聴こえてくる。

「昨日は、ごめんねナルト。黙って夜、ベッドに忍び込んで。」「  
舌を出していいのは謝る。」

【もう、済んだ事はいいよ。】  
そう言っつてナルトは、両手を頭の後ろにまわす。

「…それにしても、あんたの事パパやママまで知っていたなんてね。  
」……………」

事の始まりは遡ること、数十時間。

泣き疲れ眠っているいのを、このままにしておく訳にもいかず。困り果てたナルトはとりあえず、いのを家に送ることにした。当初、いのを送った後ナルトは立ち去ろうと思っていたが、いのいちといずみに今晚は、泊まっつていけと引き止められたのだ。

元々、ナルトはいのいちや、いずみを含む山中家、奈良家、秋道家、日向家、には幼い頃から世話になっており、里人に差別されながらもこれらの大人達が親代わりに見守ってくれたからこそ、今のナルトがあると言っつても過言ではない。

そして、今ナルト、いの、いのいち、いずみの四人で話合いの場が持たれていた。

「それでは話してくれ、ナルト。どうやら娘に、これ以上隠し通すのは無理のようだからね。」そう語るいのいち。

【ああ、まあ仕方がないさ。…でも、さすがおっちゃん娘だ。まさか、オレの正体を暴くとは。】

「エヘッ?」



いのは、ナルトに褒められ嬉しいのか、何処か嬉しそうだ。

【いの、オレに九尾の妖狐が封印されている所までは話したな。】

「ええ。」

【あと、もう一つ隠していたことがある。】

「それはもしかして、本来のナルトに関係すること？」

【さすが、察しが良いな。…まずは、オレの所属についてだ。】

そう言っつてナルトは一瞬にして、自らの着慣れた漆黒の装束を身に着ける。そして、付け慣れた狐の面を取り出す。

【…木の葉、暗殺戦術特殊部隊零番隊長、漆黒の瞬神、夜狐…  
それが、オレのもう一つの顔さ。】

いのはナルトの暗部姿を見て、昨晚一回見ているとはいえ改めて間近で見ると、見取れてしまう。

【どうしたいの？…大丈夫か？】

ナルトに顔を覗きこまれ、顔が赤くなるいの。

ナルトは何故いのが見取れているか、解かっていない。

その様子を見て、いのいちといずれみは思わず笑ってしまう。普段、戦闘において最強を誇る漆黒の瞬神も、女心は解らないようだ。

「…だ…大丈夫だから…続けて。」

そうやって何とか誤魔化した。

【わかった。】

【じゃ、最後に、オレに九尾を封印した四代目火影は、オレの父親だ。】

そこからの、ナルトや自分の両親の話によると、自分の両親を含め、山中家、奈良家、秋道家、日向家の頭首は皆、四代目火影の友人だったらしく四代目に頼まれ、ナルトを守り育ててきたらしい。

それを聞いてやっと、いのは全ての事柄のつじつまが合うと思った。だいたい、見ず知らずの赤子に九尾の妖狐を封印するだろうか。まずそれは考えられない。

四代目の息子となればナルトの出生も両親の態度も頷ける。

しかし、ナルトは父親はおるか母親の顔も知らないらしく。何故、四代目は息子である自分に九尾を封印したのか。それを知りたいが、現在、知る術はないとナルトは最後に語った。……………

「あっ…そういうえば、ヒナタやシカマル、チョウジもこの事知ってたのよね？」いのは、聞こうと思っていて聞けなかったことを口にした。

【そうだな。あいつらとは、幼い頃から付き合いが在るからな。】

「何、それって私だけ仲間ハズレじゃないの。」そうやって頬を膨らますいの。

【その事は、本当に悪かったと思っている。…すまない。】

素直に謝るナルト。

「それじゃ、今度…デートしてくれたら許してあげる。」  
少し頬赤くしているのは言う。

【おい、おい。】

全く。アッコにしても女というのは、良く解らないものだとなルトはおもった。

そうこうしている内に、二人はアカデミーに着いた。……………

「おい、おい、マジかよ。」

そうやって頭を抱えるシカマル。

昼休みナルトは教室で、ヒナタ、シカマル、チョウジに昨日の事を全て話した。

「ま…まさか…昨晚覗いていたのが、いのだったなんてね。」

そう驚いているのはチョウジ。シカマルと同じく、この幼なじみに知られたことの面倒臭さを知っているからだ。

「そうよ！何か文句あるのチョウジ！」そうやってチョウジに詰め寄る。

「い…いや別に。」

【まあ、そう言う訳だ。皆も、よろしく頼む。】

このままだと危ない雰囲気だったのでナルトが締め括った。

「さて、それじゃナルト一緒にお昼食べましょ。」そう言いながらいのはナルトの腕に抱き着く。そんな大胆な、いの行為に驚く一行。しかし、ナルトの態度は至って普通である。

（なるほど、いのの奴ナルトに惚れたな。）シカマルは、今までのいのの行動を見てそう感じた。

（しかし、ナルトも相変わらず鈍いな。）ちなみに、チョウジもシカマルと同じことを考えていた。しかし、ヒナタの表情は少し暗い。

【ああ、構わない。皆も一緒に来るか？】

「ああ、別に俺は構わないぜ。」

「よし、ご飯だ？ご飯？」

誰よりも楽しみにしていた時間に喜ぶチョウジ。

【ヒナタも来るだろ？】

当然ヒナタも来るだろうと思いナルトは誘う。

「…今日…今日は止めとくよ、…ありがとうナルト君。」  
そう言うヒナタの悲しそうな顔をいのだけは、見逃さなかった。

「ごめんナルト。やっぱり、今日は私ヒナタと一緒に食べるわ。」

【…あ…ああ、わかった。】

「い…いのちゃん。」  
そう言うといのは、ヒナタの手を引いてさっさと何処かに行ってしまった。

残された三人は、突然の出来事に呆気にとられていた。……………

……

アカデミー、校舎の屋上此処は日も良く当たり、心地好い風が吹くので、良く生徒たちが休みに訪れる場所でもある。  
そこに、腰掛け昼食を取っている二人の少女。

「…いのちゃん。本当に良かったの？別に…お昼あのままナルト君と一緒に食べれば良かったのに。」

「別に構わないわよ。私もヒナタと食べたいと思ってたから。」  
それを聞いて「ありがとう」とヒナタは言った。

「あ…あの…いのちゃん。」

「どうしたの？」  
呼ばれたので、振り向くいの。

「…やっぱり、なんでもない。」  
ヒナタがそう言うのを聞いて、いのは何か思い付いたような顔をす  
る。

「ヒナタ？…あなた、ナルトのこと好きでしょ？」  
それを聞いて、ヒナタの顔はどんどん赤くなっていく。

「い…い…いのちゃん！」  
ズバリ、凶星を指摘され慌てふためくヒナタ。

「別に、隠すこと無いわよ。鈍感な、ナルトならともかく、私の目は誤魔化せないわよ。」

「…え…えつと…。」  
余程恥ずかしいのだろう、ヒナタは手を胸の辺りでモジモジさせている。

(あと一息で墜ちる。) そう確信したのは、ここでトドメの一言。  
「もう、観念して正直に吐きなさい！」  
そう真剣に自分を見つめるいのに、ヒナタはとうとう覚悟を決めた。

「…す…好きだよ。ナルト君のこと…」  
「やっぱりね。そうだと思った。」 そう笑顔で応えるいの。

それで、安心したヒナタも吊られて笑顔になる。

「それで、…いのちゃんはナルト君のこと、どう思っているの？」  
「ええ、好きよ。」  
正直にいのは答えた。

「いのちゃんは、ナルト君の何処が好きなの。」

これだけは、聞いておこうと思っていたことだ。いのは、ナルトの事を知った。しかし、ヒナタはそれを知った上でナルトの事を愛している。その上で、いのがナルトのことをどう思うか知っておきたかった。

「…そうねえ、挙げればキリがないけど…やっぱり真っ直ぐで、優し過ぎるぐらい優しい所かな。」

そう言ういのの表情は、さっきと打って変わって思い詰めたような顔をしている。

「…ナルトは、優し過ぎるのよ。…自分でも解っていないみたいだけど。」

しかしヒナタには、いのの言っている事は理解出来る。

ナルトは幼い頃から、里人に忌み嫌われ続けてきた。本来なら、木の葉の里を恨んでいても可笑しくはない。

にもかかわらず、ナルトは暗部に所属し日々、危険な任務を続けている。

今ある木の葉の里の平和は、そんなナルトの犠牲のお陰で成りたっている。

そんな中でいくら自ら望んだ事とはいえ、傷つきながらも戦うナルトを見て、ヒナタは優し過ぎると思った事もある。

「そんなナルトを見ているとさ……なんか、支えてやりたくなるのよ。」

「まだ…アイツの事を知って間もない私が偉そうな事言えないけどさ、…アイツの背負う、痛みや悲しみを少しでも取り除いてやりた…って思うのよ。」

「いのちゃん……ありがとう。……」  
さつきまでは、不安を感じていたが、今は自分以外にナルトの事を、  
そこまで想っていた人がいたことが、正直ヒナタは心の底から嬉し  
かった。

「別に、感謝される様な事は言っただけ……ところでヒナタはど  
うなのよ。」  
ヒナタに、感謝され少し恥ずかしかったのか、照れ隠しに話しを逸  
らすいの。

「いのちゃんと同じだよ。私もナルト君を支えたいと思ってる。」  
そう微笑む、ヒナタの横顔を見て素直に可愛いと、いのは思った。  
もちろん、同性としての話だが。

「……そっか、ヒナタも私と同じ良かった。」  
そう言っただけ、微笑み合う。

「私……今考えたんだけど、将来ヒナタと私の二人でナルトのお嫁さ  
んにならない？」

「い……いのちゃん……」  
ヒナタはいのの突然の思い付きに驚く。

「えッ、だってそうすれば、毎日楽しそうじゃない。」  
そう、サラッと言いのけるいの。

「で……でも。」  
ヒナタにもその提案は、魅力的だが、さすがにそれで良いのか正直  
迷う。



「大丈夫よ。周りが何と言おうと、私たち二人でナルトを支えましょ！」

何の迷いもなく、言っただけのけるいを見てヒナタも将来そういうのも、悪くないかなっと思っただ。

「フフ……いいな、いのちゃんは解りやすくて。」

「何よ、それって、まるで私が馬鹿みたいじゃない。」  
少し不機嫌な顔をする。

「…ごめん、そういうつもりじゃ。」

「ごめん嘘よ。ありがとうヒナタ。」  
舌を出して笑ういの。

「クスッ。」  
それに吊られてヒナタも微笑む。

こうして二人はこの後、昼休み一杯語り合った。

アカデミーでの一日も終わり、生徒達は帰る支度を始める。

「ヒナタ？一緒に帰りましょ。」

「うん？」

そう仲良く会話している二人を見てシカマルは、ナルトに声を掛け

た。

「おいおい、あの二人どうしたんだよ。急に仲良くなったみたいじゃねえか？」

「そうだね、さっきまでは大違いだね。」  
「チョウジも、シカマルと同じことを思っていたようだ。」

【まあ、仲が良いのは悪いことでは無いだろう。】

「確かに、そりゃそうか。」  
（あの昼休みの中に何かあったな。）  
シカマルはそう思った。

「ナルト、シカマル、チョウジ帰るわよ。」

「みんな、一緒に帰ろ。」

そう言う二人の少女は、何処か吹っ切れた様な清々しい顔をしていた。

## 第参話 少女と少女の出会い（後書き）

### 人物紹介

うみの イルカ

所属

木の葉隠れ 中忍

木の葉隠れの里の忍。

アカデミーの教師をしており、心優しい性格から多く生徒達からも慕われている。

ナルト達の担任である。

ナルトの正体を知っており、親を知らないナルトにとって父親的存在。

暗部で危険な任務を続けるナルトのことを、絶えず気に掛けている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9423v/>

---

NARUTO 木の葉を守りし閃光の遺産

2011年10月3日23時01分発行